第 4 章　北方民族の衣

寺嶋優駿

4.1　北方民族について

北方民族という言葉は、何度も使われてきた言葉であるが、どの民族が北方民族であるか、また、北緯何度以上が北方民族であるかなどと定義づけることは難しい。

北半球のおもに寒帯、亜寒帯気候の地域に暮らす北方民族は、自然環境や歴史的条件に応じて、ユーラシア極北のトナカイ遊牧や北アメリカ極北海岸の海獣狩猟、北太平洋を取り巻く地域のサケ漁などのように、それぞれの地域の特徴を生かしながら伝統的な生活を行ってきた。

大ヒットディズニー映画『アナと雪の女王』の舞台のモデルとなったのは北欧ノルウェーで、アナと一緒に冒険する男性、クリストフのモデルは、まさに北方民族のサミ族である。

図 4-1　アナと雪の女王のクリストフ

出所：アナと雪の女王 HP

4.2　衣文化

4.2.1　生活に適した衣類

人間が寒冷地で暮らしていくためには、他の動物の毛皮を身に着けなければならない。それぞれの地域や民族によって使用した動物の毛皮は異なる。防寒着としてもっともよく用いられたのは、暖かいトナカイの毛皮である。肌に触れる側に毛皮を向けた服を内側に着て、毛を外側に出した外着を重ねることで、厳寒期でも野外の活動を行うことができた。

トナカイに加え、軽くて暖かい羽を持つ鳥、防水性の高いアザラシや魚の皮が衣服の主な素材で、それらは用途によって使い分けられていた。そのほかの動物の皮や植物繊維は、利用する地域が限られていたり、装飾の材料や帽子、靴下など付属的な衣類に用いられるなど一般的ではない。

また、海獣の腸なども、防水服の素材として用いられていた。

表 4-1　生活を適した衣類の例

	上衣・スカート・帽子 （ウィルタ民族：樺太） 前身頃を重ねて肩と脇でとめる形の上衣はアムール川流域からサハリンにかけての地域に特徴的である。下にはズボンや脚絆をはき、冬季、猟などに出るときには、風を防ぎ服を守るために、上衣の上から魚皮やアザラシ皮製のスカートを付けた。
	腸製パーカ （エスキモー：アラスカ） （イヌイト：カナダ） シベリア東端からグリーンランドまでの極北地域で多く使われた。防水性に富み、舟に乗る時の必需品であった。素材は、アザラシやセイウチをはじめクジラやヒョウなどの海獣や魚の腸、その他の内臓膜であった。
	アツシ （アイヌ：北海道） アイヌ語でオヒョウ（ニレ科の樹木）の樹皮繊維のことを「アツ」といい、その織物を「アツシ」という。寒冷な北方地域において植物繊維を素材とする衣服を用いる民族は、アイヌや北アメリカの北西海岸インディアンなどごく限られているが、植物性の靴下や手袋などは、他の方太平洋沿岸の民族にも見られる。

片原顕光撮影

4.2.2　装飾・色・形・文様

色や形、文様は衣類を美しく見せるという効果のみならず、動物への畏敬の念や、魔除け、着る人の性別や身分などを示す働きを持っている。寒さや外傷を防ぐなど、衣類のもつからだを守るための基本的な役割だけではない、これら精神文化や社会的象徴が装飾にはこめられている。

動物の背中と腹の毛色の違いなど、自然の素材そのままの美しさを利用したのはいうまでもなく、クマの牙のようにとらえた獲物の一部を狩猟者の誇りとして身に着けることもあった。

図 4-2　ベルト（エスキモー）

片原顕光撮影

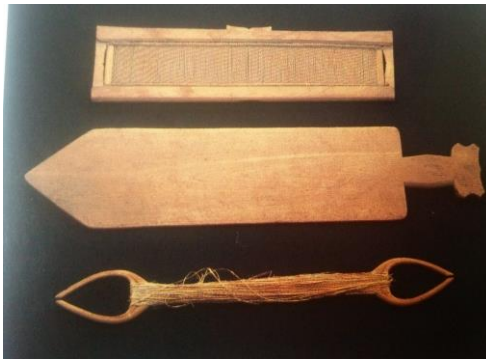
また、近隣のヨーロッパ人などとの交易によって手に入れた貝、金属、ビーズの類も貴重品として装飾に用いられた。

4.2.3　衣類の製作と管理

衣類をつくり、日常の衣類をいつでも着やすく管理しておくことは、女性の重要な仕事であった。極寒の地において、衣類の状態が悪いことは死にもつながるからである。

剥いだままの動物の皮から余分な肉や脂肪などを落とし、繊維をほぐして柔らかく丈夫な素材にする皮なめしの工程は、手間と時間のかかるものである。なめされた皮は、形や部位の性質を生かして巧みに裁断され、仕立てられた。縫い糸には、動物の腱やイラクサなどの繊維が利用され、交易で入手した金属製の針は大変貴重なものだった。

図 4-3　筬・箆・杼（アイヌ）



片原顕光撮影

女性たちは常に家族全員の衣類に気を配り、硬くなった皮をほぐしたり、ほころびを繕ったりしていた。

4.2.4　現代における北方民族の衣

欧米やロシアとの交易を通して、大量生産された素材がもたらされ、北方の地域の衣文化も次第に変容してきた。しかし、毛皮で作られた服は、保温と通気性の面で化学繊維よりもすぐれており、冬季には今でも愛用されている地域もある。伝統文化が急速に失われつつある中で、伝統的な衣類は民族のアイデンティティを示すものとして、現在も儀礼や祭など特別な機会に着用されている。

図 4-4　アイヌの祭の様子

出所：阿寒湖アイヌコタン HP

4.3　北方民族博物館

北海道立北方民族博物館は北方地域に生活する民族の文化と歴史を研究し、あわせてひろく道民のこれら民族への理解を深めることを目的として 1991 年 2 月 10 日、東部オホーツク海沿岸の網走市に開館した。北方地域を専門とする点で日本では唯一の、そして世界的にも数少ない民族学博物館である。

常設展示の入り口には大きなマンモスの剥製がある。東はグリーンランドのイヌイト（エスキモー）から、西はスカンディナビアのサミまで、ひろく北方の諸民族の文化を対象として、それらのもつ共通性と多様性について研究を進め、それにもとづいて展示をはじめとするさまざまな博物館事業がおこなわれている。

収蔵資料は、網走市から寄贈を受けたものとアメリカ、カナダや北欧諸国において収集したものからなっている。これらをもとにした常設展示は、それぞれの民族ごとに完結する手法をとらずに、衣食住、生業、精神文化といった分野ごとのテーマにもとづいて構成している。そして、実物資料を理解していただく補完的な役割としての映像資料や音響資料、コンピュータをつかった検索型の解説システムが展示室内に積極的に取り入れられている。また、列島の北の門戸にあたる北海道において、北東アジアと深い関係をもった先史文化であるオホーツク文

図 4-5　北方民族博物館

出所：北方民族博物館 HP

図 4-6　マンモスの剥製

出所：北方民族博物館 HP

化を紹介したコーナーがある。このような常設展示にくわえて、各種テーマに沿った特別展も随時おこなわれている。

表 4-2　過去の特別展

1990 年	開館記念特別展『北の色・形・文様』
1991 年	第 2 回特別展『シベリアのトナカイ遊牧民ネネツ展』 第 3 回特別展『アイヌ文化にみる猟と漁』
1992 年	第 4 回特別展『サハリン先住民の精神世界』 第 5 回特別展『マヤ：歴史と民族の十字路』
1993 年	第 6 回特別展『北緯 55 度・アラスカ半島の先史文化』 第 7 回特別展『鳥居龍蔵のみた北方民族』
1994 年	第 8 回特別展『あそび・ゲーム・おもちゃ』 第 9 回特別展『北方民族の船：北の海をすすめ』
1995 年	第 10 回特別展『大河アムールの民・ナーナイ：アムール民族芸術館所蔵資料展』
1996 年	第 11 回特別展『たばこと民族文化：たばこが北方に伝わるまで』
1997 年	第 12 回特別展『樺太 1905-45：日本領時代の少数民族』
1998 年	第 13 回特別展『人、イヌと歩く：イヌをめぐる民族誌』
1999 年	第 14 回特別展『神の魚・サケ：北方民族と日本』
2000 年	第 15 回特別展『トーテムポールとサケの人びと：北西海岸インディアンの森と海の世界』
2001 年	第 16 回特別展『美しき北の文様　the brilliant northern design』
2002 年	第 17 回特別展『狩る：北の地に獣を追え』
2003 年	第 18 回特別展『先住民社会と水産資源：サケ・海獣・ナマコ』
2004 年	第 19 回特別展『北の遊牧民　－モンゴルからシベリアへ－』
2005 年	第 20 回特別展『アイヌと北の植物民族学　～たべる・のむ・うむ～』
2006 年	第 21 回特別展『環北太平洋の文化 1　コリヤーク：ツンドラの開拓者たち』
2007 年	第 22 回特別展『環北太平洋の文化 2　世界で一番ダイナミックな海　ベーリング海に生きる人びと　舞台は極北のベーリング海　自然も文化も歴史もひとめぐり　チュクチもエスキモーもアリュートも　日本人も大活躍』
2008 年	第 23 回特別展『環北太平洋の文化 3　トーテムの物語～北西海岸インディアンのくらしと美』
2009 年	第 24 回特別展『北太平洋の文化 4：千島列島に生きる－アイヌと日露・交流の記憶』
2010 年	第 25 回特別展『ナカイのパーカとアザラシのブーツ』
2011 年	第 26 回特別展『ウィルタとその隣人たち～サハリン・アムール・日本』
2012 年	第 27 回特別展『東シベリア・サハ　永久凍土の大地に生きる』
2013 年	第 28 回特別展『極北の島グリーンランド　氷海のハンター、エスキモー』

出所：北方民族博物館 HP より筆者作成

4.4　アイヌの文様

北方民族独特の文様は衣服だけでなく他でも使われていた。

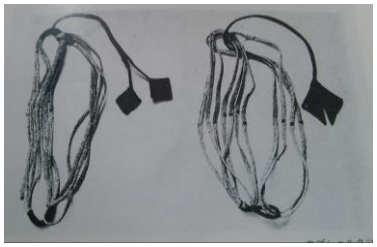
アイヌにはイトッパと呼ばれる文様が存在する。イトッパとは家系を表す「しるし」である。アイヌの人々の家系を表すイトッパ（家標）は主としてイクパスイの表面や裏面にマキリ（小刀）で彫りこんだしるしとして見ることができる。そのしるしは、直線を組み合わせたシンプルな形が多く見られ、二本線または三本線を上下に記し縦の直線で繋ぐもの、中央に「×」や曲線を配置した線を彫り込んだものなどがある。

また、女性は一人前の女性であることをあらわす、ウプショルクツと呼ばれる腰巻を身に着ける風習があった。ウプショルクツを与えられる時期については、基本的には婚姻の相手ができたときである。ウプショルクツは、イラクサ、ハイという植物の皮・マダの木の皮の繊維・麻糸などで編んだ紐を折り曲げた腰巻である。

図 4-6　イクパスイ

出所：瀬川（1998：2）

図 4-7　ウプルショルクツ



出所：瀬川(1998：2)

参考文献

・北海道立北方民族博物館，2013,『北海道北方民族博物館総合案内』.

・瀬川清子，1998,『アイヌの婚姻』，未來社.

参照 HP

・北方民族博物館 HP

http://hoppohm.org/index2.htm

・阿寒湖アイヌコタン HP

http://www.akanainu.jp/

・アナと雪の女王 HP

http://www.disney.co.jp/movie/anayuki.html